

Q3 校内を動き回る場合

〈このような状態は自閉症の特性からきています。〉

A ちゃんは、授業時間中、自分の教室にいないで学校中を動き回ってしまうことがあります。校舎内のいろいろな所を探索しているようで、気がついた教師が教室に連れ戻しても、また教室を出てしまいます。

自閉症の子どもの一部には、このような行動をする場合があります。学校というものの性質や、教室にいないといけないことの意味が分かっているための行動です。学校がどんな所か自分なりに確認できるまでは、落ち着かないという自閉症児もいます。そのため、一通り学校内を探索して歩く時期が必要なケースです。

また、教室にいないといけないことがある程度分かってきた段階でも、自閉症の子どもの一部には、外からの刺激につられて立ち歩く場合もあります。情報の取り入れ方や統合の仕方が独特な自閉症児には、例えば、先生の声と外の物音が同じレベルで耳に入ってくることがあり、外から興味のありそうな音が聞こえたら自然に身体が動いてしまうのです。

さらに、自閉症児には感覚の過敏や異常がある場合が多く、子ども集団の喧噪に耐えきれなかったり、他児からの働きかけを苦痛に感じたりして、その場から逃れ、静かな落ち着ける場所を求めて校内を歩き回る場合もあります。同じような行動でも、子どもによって背景となる原因がそれぞれ違っているのも自閉症児の特徴といえます。

〈このような場合の支援 1〉

小学校1年生の知的障害を伴う自閉症の男児。聴覚的に過敏なところがあり、ときどき、耳ふさぎをしたり泣いたりします。多動でじっとしていることが難しく、目を離すと教室を出て校内を動き回ってしまいます。このような場合、支援の方法として以下のようなことが考えられます。

- ① 分かりやすく魅力ある授業作りを心がけ、本人にまめに声をかける。場合によっては、本児に別課題を与える。
- ② 本人の座席の周囲は、親切だが口うるさくない子で固める。
- ③ 他児の歓声などに過敏になっている時、神経的な疲れが目につく時は、静かな環境で少し休ませる。その際、手のあいている教師や養護教諭に様子を見てもらう。
- ④ 神経過敏や多動が著しい場合は、医療機関への相談を考える。
- ⑤ 能力的な困難のために、授業に関心が薄く参加しにくい場合は、個別の補助者をつけたり、TT指導や通級指導を取り入れるなど、教育措置の変更をも視野に入れて対応する。

〈このような場合の支援 2〉

小学校2年生の高機能自閉症男児。数字に関心が強く算数のテストは好成績ですが、他の教科では、いつの間にかふらっと教室を出て他の教室をのぞいたり、保健室や図書室に入り込んだりしています。このような場合、支援の方法としては、以下のようなことが考えられます。

- ⑥ 分かりやすく魅力ある授業作りを心がけ、本人にまめに声をかける。
- ⑦ 「じゅぎょう中、2年〇組を出てはいけません。」など、本人に分かりやすいことばで約束を書いて、目につくところに貼っておく。
- ⑧ 校内の職員に協力してもらい、授業中教室以外の所にいるのを見つけたら、「2年〇組にもどきなさい。」と声をかけてもらう。少し厳しい表情や口調で注意してもらうようにする。
- ⑨ 教室にいられたかどうかを分かりやすい表にして本人に見せる。つまり、行動の評価を視覚的に分かりやすく表現して示してやる。点数化してご褒美なども用意し、励みを持たせるのも効果的（家庭と協力して行うとよい）。

学級担任の記録(メモ)

<項目の利用回数>



月／日	対象児の問題	教師やクラスの子どもの対応	対応後の対象児の様子